23b/12/2005

＊近代日本文学とキリスト教＊＊＊＊＊＊＊＊　S. Ashina

４．近代化の危機と文学―夏目漱石の場合―

１．近代日本の問題、近代日本文学の社会的背景

近代国家建設という課題：

近代化（合理主義）＋国民国家の精神的基盤（天皇制・神話、前近代）

↓

伝統文化の解体と西欧化、そして日本的な教養主義の成立

教養の内実となる「古典」が西欧に求められる

近代的な個人の問題（個人主義と自由主義の問題性）

いかなる意味で日本人たり得るか、いかにして自分自身と成りうるか

↓

近代日本文学の基本テーマの一つ

２．夏目漱石(1867-1915)

多難な幼少時代、二松学舎（中学）で漢学を学ぶ、第一高等中学（大学予備門予科）で英語を学ぶ、帝国大学文科大学英文科・大学院、東京師範学校英語講師、松山中学、熊本第五高等学校講師、英国留学、第一高等学校教授、東京帝国大学英文科講師兼任、朝日新聞社入社、文学博士号辞退

俳句、小説

様々な病気

「……今日迄ただの夏目なにがしとして世を渡って参りましたし、是から先も矢張りただの夏目なにがしで暮したい希望を持つております。従つて私は博士の学位を頂きたくないのであります」(1911)

３．漱石とキリスト教

漱石は、「耶蘇坊主」嫌い、とりわけプロテスタント嫌いであり、キリスト教には距離を置いている。しかし、漱石文学あるいは漱石自身と、キリスト教は決して無関係ではない。

漱石と同志社人脈との交流

第一高等中学時代：松本亦太郎、松波仁一郎（ともに後に帝国大学教授)、大西祝

同志社在学中に同志社教会にて新島襄から受洗

帝国大学時代：中島力造（倫理学)、元良勇次郎（心理学)、神田及武（ラテン語）

松山時代：弘中又一、浜本利三郎

第五高等学校時代：奥太一郎

朝日新聞社時代：弓削田精一

４．近代人のエゴイズムとその超克

近代人・近代社会（自由主義、個人主義)：

しかし、そこにはどうしようもない孤独とエゴイズムがある。
伝統的な人間の絆の変容、まだ新しい共同性は未成熟

どう生きるのか　→　則天去私

漱石も、キリスト教と近代西欧文学が深めた人間のテーマを、近代日本人として受け継いでいる。聖書という共通の基盤。

５．漱石文学のテーマ

初期作品：『吾輩は猫である』(1905)、『坊っちゃん』(1906)
明治の文化人や文明社会への風刺

初期の実験的作品：『草枕』(1906)、『虞美人草』(1907)
西洋と東洋の文芸論・人生観をそのまま小説化する、美文体、漢学と西洋文学の素養をふんだんに盛り込む。

中期の青春小説三部作：『三四郎』(1908)、『それから』(1909)、『門』(1910)
三四郎－美禰子、代助－三千代、宗助－御米
男女の間の愛のあり方、告白のタイミング、
個人主義的な自然の愛と社会的な道徳（家庭・夫婦の倫理）との相克　→　苦悩

後期作品：『彼岸過迄』(1912)、『行人』(1912)、『こころ』(1914)、『道草』(1915)、『明暗』(1916)
内面の心理描写の深まり、近代人の苦悩（傍観者・懐疑・人間不信、エゴイズム、罪、贖罪）

６．『こころ』

(1)鎌倉で「私」が「先生」と出会う。「奥さん」の二人きりでひっそり暮らしている謎の多い人物。大学卒業後故郷で、突然先生からの分厚い手紙が届く。

(2)先生の過去を綴った手紙。叔父に財産を横領され人間不信に陥る。上京して軍人の未亡人の家に下宿し、御嬢さんに恋をする。同郷の友人Kが同居。先生は、下宿の奥さんにも、御嬢さんにも、Kにも心を開くことができない。Kが御嬢さんに恋していることを打ち明けられるが、それを裏切り、奥さんに御嬢さんとの結婚を申し込む。それを知ったKの自殺。御嬢さんとは結婚できたが、Kのことを記憶から消すことが出来ない。明治天皇の死に殉死した乃木大将のように、自分も「明治の精神」に殉じて死ぬと告げる。

７．「叔父に欺かれた当時の私は、自分はまだ確な気がしていました。世間はどうであろうともこの己は立派な人間だという信念が何処かにあったのです。それがKのために美事に破壊されてしまって、自分もあの叔父と同じ人間だと意識した時、私は急にふらふらしました。他に愛想を尽かした私は、自分にも愛想を尽かして動けなくなったのです。」(52)
「世の中で自分が最も信愛しているたった一人の人間すら、自分を理解していないのかと思うと、悲しかったのです。理解させる手段があるのに、理解させる勇気が出せないのだと思うと益悲しかったのです。私は寂寞でした。何処からも切り離されて世の中にたった一人住んでいるような気がした事も能くありました。」(53)